

ハッピーアイランド 福島

東日本大震災から、7年目を迎えようとしています。西条市立橋小学校は、校名が同じという縁があって、福島県の郡山市立橋小学校と交流を続けました。

震災から2か月たったころに届いた手紙の一部を紹介します。まずは、地震が起きた時の状況です。

いきなりブランコみたいに強くゆれてびっくりしました。この世の終わりかと思いました。体育館のかべや集会ホール天井が落ちました。(5年生)

急にふぶきになったり、よしんが起きたりして、こわくて泣いてしまいました。でも、みんなで力を合わせなきゃあいけないと思い、毛布や上着は、小さい子にあげて、ぼくと6年生は、寒いのをがまんしました。(4年生)

水が出なくて、外で食器を洗いました。冷たかったです。(3年生)

やさしく力強い子どもたちから、勇気と元気をいっぱいもらいました。

ところがその後、耳をふさぎたくなるような出来事が続けて起きました。

『どこから来たの』と聞かれたので、『福島から』と答えると、『放射能がうつる』と叫び、逃げて行った。『幼稚園に入園させようとしたら、園側から『福島から来たことは内緒に』とくぎを刺された。』など、避難先でのいじめやホテルの利用拒否などの報道が相次ぎました。『ばい菌』と呼ばれ、多額の金銭を要求された生徒は、「いままでなんかいも死のうとおもった。でも、しんさいでいっぱい死んだからつらいけどぼくは生きるときめた。」と手記に書き、思いを伝えました。

そして、「福島差別」という言葉が作りだされました。これは、放射線による被害という自然科学の問題であるかのように見せかけながら、私たちが人為的に作りだしてきた社会問題です。そこに見られる偏見に基づく排除や忌避の意識は、他の差別事象につながるものがあります。差別は、いかなる理由があろうとも許されてはなりません。

最後に、福島の子どもたちから届いた、西条の友だちへのメッセージを紹介します。

ほうしゃのうがおさまったら、いっしょにあそぼうね。(1年生)

そちらはたいへんなことは、ありませんか。かなしいことは、ありませんか。

いつでもそうだんにのりますよ。いつか会えるといいですね。(2年生)

震災前に、400人ほどいた友達が、今では360人に減ってしまいました。

でも、私たちは負けません。

福島は、ハッピーアイランド。「福」のある「島」なのです。(6年生)

「福島差別」なんて言葉をつくりだした私たちの社会に届いてほしい、子どもたちの温かさたくましさです。